

2024年12月期第2四半期決算説明会 質疑応答の内容

<2024年8月14日に開催した決算説明会における質疑応答の概要です>

【回答者】

取締役 代表執行役社長	浅見 正男（以下、浅見）
執行役 建築・産業カンパニープレジデント	永田 修（以下、永田）
執行役 エネルギーカンパニープレジデント	宮木 貴延（以下、宮木）
執行役 インフラカンパニープレジデント	太田 晃志（以下、太田）
執行役 環境カンパニープレジデント	山田 秀喜（以下、山田）
執行役 精密・電子カンパニー 共同 COO	南部 勇雄（以下、南部）
執行役 CFO	細田 修吾（以下、細田）

質問者 1：1点目は、会社計画対比の実績について、確認したい。決算説明会資料の6ページを見ているが、営業利益の背景を教えてください。

特に、エネルギーの営業利益は上期（1-6月）の計画に若干届いていない一方で、精密・電子は上振れている。この背景について、もう少し説明してほしい。

宮木：エネルギーの営業利益は、上期計画の90億円に対して75億円で着地した。これは、売上収益が上期計画の965億円に対して、926億円となったことによる。今期の売上収益は、製品が多くを占めるが、サプライヤーからの主要部品の納入が5月時点の計画よりも遅れたため、上期計画比で減収となった。

通期では、サプライヤーからの納入の遅れはキャッチアップできると見ており、通期の売上収益および営業利益は、計画を達成できる見込み。

南部：精密・電子では、上期計画の170億円に対して192億円で着地した。22億円上振れた理由は、一つは、お客様の工場稼働率が想定よりもかなり上がっていて、サービス&サポート（S&S）の比率が上昇したことが利益率の向上につながった。もう一つは、上期に計画していた固定費が、若干下期にずれ込み、計画ほどは発生しなかった。

質問者 1：2点目は、精密・電子の受注高について確認したい。CMP とコンポーネントに分けた時に、それぞれをどのように見ているか。

精密・電子全体では堅調な進捗のように見え、コンポーネントはしっかり業績も出てきているが、CMP は、計画対比でも YoY でも、少しトレンドが違ってくるように見える。コンポーネントの稼働率がいいとの話があったが、CMP の下期に向けての受注確度について、現状の認識をあらためて説明いただきたい。

南部：受注高の傾向としては、コンポーネントは上期計画を達成したが、装置（CMP・その他）は上期計画に未達で、下期の計画も若干積み上がっている。

理由は、コンポーネントと装置で、顧客のミックスが若干異なるのと、装置は下期に向けて、お客様の投資が伸びていく傾向になると見ているため、下期に受注の比重が上がる形にしている。

質問者 1：その点について少し確認したい。CMP のお客様の傾向として、アジア地域や日本、もしくは先端メーカーなどで、引き合いにある程度の差があるが、それも今回の計画に入っているか。直接的な顧客名は難しいと思うが、地域やお客様の領域別に、引合いの状況や受注確度について、もう少し補足いただきたい。

南部：先ほど話した「顧客ミックスに違いがある」という点の補足ということだと思うが、基本的には、中国の比率は装置のほうが若干高い点が少し影響している。また、HBM などの生成 AI 系の投資の増加においては、装置のほうが恩恵を受けやすい傾向にある点も、もう一つの理由としてある。

浅見：私から補足すると、これには、当社のコンポーネントと CMP という製品群の特徴も影響している。コンポーネント、主にドライ真空ポンプは、さまざまな真空系の装置に使われ、半導体製造装置の投資動向にならった増え方、減り方をします。

CMP は、当社の製品がメインに使われている割合が多いのは前工程の中の配線工程なので、タイミングとしては、装置全体の投資動向よりも多少後ろにずれる。

質問者 1：最後の質問だが、今回、トピックとして決算説明会資料の 21 ページに、生成 AI 向け半導体と製品需要の関係性の紹介がある。昨今、この生成 AI 向けの需要が強くなってきていることは、業界全体の話題にもなっているが、中期経営計画 E-Plan2025 の受注計画には、どこまで織り込まれているか。数字のイメージがあるとなお良いが、われわれは、中計との対比の観点で、この新しく出てきた需要をどのように見ておけばよいか。

南部：この生成 AI の成長は、ある程度織り込み済み。

質問者 2：3点伺いたい。一つ目は、CMP の受注に対する考え方。1Q に引き続き、2Q も QonQ でほぼ横ばいで、計画比でもやや弱いが、下期に本当に回復が見込めるか。3カ月前も同じような議論があったが、どのように考えているかを聞きたい。

また、少し中国向けが弱いことを示唆いただいたが、ローカルの装置メーカーとの競争環境に変化はないかも合わせて聞きたい。

浅見：先ほど私がお話ししたように、コンポーネントに比べると CMP は傾向として、多少、投資の立ち上がりが遅れ勝手になるということは理解した上で、今の傾向を見てほしい。

南部：今回、新たに追加した四半期ごとの資料を見ての質問だと思うが、Q1、Q2 は確かにほぼ同等で推移している。

Q3、Q4 を展望すると、今回のトピックで挙げた生成 AI 向け投資の兆しは見えているので、下期の受注計画の確度は高いと見ている。

また、先ほどの中国向けに関する質問について少し補足すると、コンポーネントと装置を比較すると、コンポーネントのほうがやや弱いと説明したが、装置が今後、弱くなっていくということではない。

ローカルメーカーの台頭については、われわれも認識しており、今後も競争は高まっていくと考えている。

質問者 2：補足で伺いたい。先ほど、中国について質問した背景としては、3カ月前に、受注高が FY23Q4 の 410 億円から Q1 には 286 億円と、QonQ で 3割程度減った点について、中国向けの減少が大きな要因との説明があったことがある。荏原の認識では、シェアを取られているのではなく、単純に中国における投資のタイミングの問題と考えているのか。

南部：はい。タイミングの問題だと考えている。

質問者 2：また、生成 AI 向けの需要について話があったが、それ以外のところで、下期に向けた受注の見通し、あるいは来期に向けて、お客様の投資動向に変化が見られるようなアプリケーションはあるか。ロジック、メモリーに分けて、話せる内容があれば伺いたい。

南部：一番大きいのは生成 AI だが、それに付随した形で、サーバー向けなどの需要も強まっている。

今回のトピックスでは、生成 AI 向けのチップセットを説明したが、それ以外にも、サーバー向けの SSD などの需要は、今後高まっていくと見ている。

浅見：NAND フラッシュも価格が底を打ち、お客様も投資に向けて前向きなコメントが出てくるようになっているのは、一つの変化だと思う。

質問者 2：もう 1 点、精密・電子の営業利益について確認したい。先ほど、固定費の下期へのずれや、S&S 比率の上昇などを背景とした収益性の良い案件の売上が、上期の増益に寄与したとの説明があった。営業利益の上振れの継続性を考えたいのだが、案件ミックス改善の寄与と固定費のずれが、それぞれどれくらいの金額規模かを伺いたい。

南部：固定費のずれについてはお話しできないが、案件ミックス改善の継続性に関しては、Q1、Q2 でのお客様の工場稼働率の上昇による S&S 比率の上昇が非常に大きく寄与している。今後の見通しとしては、Q3、Q4 の稼働率はますます上昇すると見ており、継続性はかなり高いと考えている。

質問者 2：3 点目は、エネルギーについて聞きたい。

先程、受注環境について、LNG 案件は市場環境に変化はないが、一部の案件で顧客の投資判断のタイミングにずれがあるとの説明があった。LNG 以外も含めて、エネルギーの受注は少しビハイインドしているように見えるので、下期にキャッチアップが可能かどうかと、受注環境の変化の有無について、もう一度確認させてほしい。

宮木：Q2 までの累積の受注高が 5 月の計画に未達である件だと思うが、これは、予定していた案件のタイミングのずれによるもの。上期の実績としては、5 月に発表した計画値に届いていないが、これは年内の期ずれなので、通期の計画値 2,000 億円は、達成できる。

その他の市場環境についても、LNG やコンプレッサ・タービンに限らず、エネルギー全般として、地域によらず、多少のタイミングのずれなどはあるが、期初の見立てから大きな変化はない。従って、通期の受注計画 2,000 億円を維持する。

質問者 3：2 点伺いたい。

1 点目は、エネルギーについて。この上期で、案件がずれた要因は何か。それは、1、2 件の話なのか、いくつかの案件が重なったのか、説明してほしい。

宮木：ずれは、お客様要因だが、主に LNG。LNG では、1 案件が、プロジェクト全体として、かなり大きな投資額を要する。そのため、お客様の発注タイミングやプロジェクト組成のタイミングも、いろいろなことに左右される。それに伴い、当社への発注タイミングや入札のタイミングが遅れている。

当社においても、LNG 関連の 1 件のずれによる受注高への影響はかなり大きくなるが、数件の単位で、タイミングのずれが生じている。

質問者 3：Q1 において、北米の受注が弱かった要因は、S&S が少し遅れたという議論だと思っていた。今回は、S&S はいいのだけれど、製品が遅れたという理解でいいか。

宮木：そのとおり。5 月は、今回とは別の案件で、下期に予定していたものが上期に入り、上期の受注計画を上方修正した。6 月が終わった時点では、S&S の受注は順調だが、1 件あたりの金額が大きい製品で、タイミングのずれの影響を受け、今回の着地に至った。

質問者 3：2 点目は、決算説明会資料の 21 ページの生成 AI 関連について。HBM の話でいいが、従来の例えば、汎用 DRAM と比べて、1 ラインに使われる CMP の数は大きく違うのかについて確認したい。

当然、HBM は積層するので、両面で CMP が必要になり、必要数が増えてくる。デバイスの数量に比べて、かなり多くの CMP が必要か。もしくは、HBM に対応した CMP の機種があるので、必要数は余り変わらないか。台数と製品技術は、従来の汎用 DRAM と HBM とで、違いがあるのかについて、確認したい。

南部：HBM と言われる、いわゆるパッケージになるが、DRAM のパッケージは、そのパッケージの中に決算説明会資料 21 ページの絵にあるような DRAM のチップが積層されていて、現在は、技術的にはマイクロバンプのようなものでチップ間を積層している。今後、そのチップとチップの間をつなぐ配線のところが、ハイブリッドボンディングになっていくだろうという技術のトレンドを踏まえ、CMP の採用数が増えていくと見ている。そうすると、DRAM を作る際の CMP の採用数は、最後の仕上げのところと裏面のところ、そこからさらにハイブリッドボンディングをするために少し細工をしたりするようなところ、そういったところで今までよりも増えてくると見ている。

ただ、具体的な割合については、DRAM の中で、CMP がどれだけの層で使われているかが、お客様によって違うので、言及は避けたい。

質問者 3：補足で、マイクロバンプを使う場合と、今後のハイブリッドボンディングの場合とで、CMP の技術、製品自体に変化は出てくるか。

南部：CMP の技術自体に、特に大きな、今までわれわれがやっていたこと以上の何か特別なことが必要とは考えていない。

質問者 4： 2 点ある。

1 点目は、為替が通期計画で 1 ドル 140 円だったので、Q1、Q2 が円安だったことを踏まえると、円安を除くと会社計画対比で、営業利益は少し未達だったように思う。何か深刻なネガティブ影響があったか、それほど気にするような話でもないのか、フォローしていただきたい。

浅見： 深刻な状況とは捉えていない。詳しくは、CFO の細田から説明する。

細田： 先ほどの説明の繰り返しにはなるが、営業利益を前年同期と比べると全体で 61 億円増加している。為替影響としては 25 億円のプラスなので、為替以外のところに関しても、利益改善要素があったと理解している。

ただ、指摘のとおり、計画対比という意味では、営業利益は、ほぼ計画通りの着地だったので、確かに計画よりは少なかったと見ることもできる。下期に向けては、計画を 140 円で見ている中で、為替の影響も注視していく。

全体としては、計画水準から変わってはならず、深刻なレベル感で未達だったとは考えていない。

質問者 4： 2 点目は、精密・電子の中国の受注について、あらためて伺いたい。コンポーネントがやや弱く、装置は弱くないというコメントがあったが、下期にかけては、生成 AI 関連、NAND 関連の投資意欲も改善するとの話もあった。中国をコンポーネントと CMP に分けたときに、トレンドがコンポーネントはちょっと弱いままとか、CMP は改善に向かうとか、中国だけを切り取ったときに、なにか製品ごとの方向感はあるか。

南部： 中国の今後だが、今のところ、われわれとしては、Q3、Q4 も Q1、Q2 と同様に、堅調に投資が推移していくと見ている。

そのような中で、CMP は、引き続き、強い引き合いがあるので、それをしっかりと刈り取っていくことが重要だと考えている。

コンポーネントの受注は、装置に比べると低いですが、最近ではシェアを上げているので、今後、CMP と同じような形で受注が取れるように邁進していく。

米中の関係の中で、米国が規制を強化する動きも報道ではある。それについては、継続して注視していかなければいけないと考えている。

浅見： 私から少し補足すると、コンポーネントは、ドライ真空ポンプが、半導体以外にも、LED、ソーラー、太陽電池関係、ほかのアプリケーションで使われている。若干、市場としては厳しいところもあるが、半導体の需要に加えて、そのような市場でもプレゼンスがあることは、理解してほしい。

質問者 5：純利益は上期で見たときに過去最高でいいのかを確認したいのと、インフラと環境の受注計画を上方修正したが、期初計画から上振れした要因をあらためて教えてほしい。

浅見：まず、利益については、細田から冒頭に説明したように、過去最高と理解いただきたい。

環境とインフラ、それぞれの受注については、基本的には、大型案件の受注が確定したため。また、下期に向けて、受注確度の高い案件も見え始めている。6 カ月間の進捗を踏まえ、インフラと環境は、それぞれ 50 億円と 60 億円、受注予想を上方修正してもよいと判断した。

以 上